

対談

守

創

破

映画というメディアは、その作品が生まれた時代と社会を色濃く映し出すものだ。半世紀以上、古今東西の知られざる傑作を見いだしてきた映画評論家・佐藤忠男氏が、映画を通じて見たものとは。映画批評を書いていた経験もある原田泰審議委員が佐藤氏に、映画で世界を理解することはできるのかを問う。



日本銀行政策委員会 審議委員

原田 泰

Yutaka Harada

1950年東京都生まれ。74年東京大学農学部卒業後、経済企画庁入庁。国民生活局国民生活調査課長、調査局海外調査課長、財務省財務総合政策研究所次長、株式会社大和総研専務理事チーフエコノミスト、早稲田大学政治経済学術院教授などを経て、2015年3月より現職。著書に『日本国の原則』（日経ビジネス人文庫／石橋湛山賞）、『昭和恐慌の研究』（共著、東洋経済新報社／日経・経済図書文化賞）、『ベーシック・インカム 国家は貧困問題を解決できるか』（中公新書）等多数。

「批評の力」で世界へ伝える 知られざる映画に光を当て



映画評論家・日本映画大学名誉学長

佐藤忠男

Tadao Sato

1930年新潟県生まれ。新潟市立工業高等学校（現・新潟市立高志高等学校）卒業。57年『映画評論』編集者、『思想の科学』編集長を経てフリー。56年『日本の映画』でキネマ旬報賞を受賞。他に芸術選奨文部大臣賞、紫綬褒章、勲四等旭日小綬章、韓国王冠文化勲章、フランス芸術文化勲章シュバリエ章受章、モンゴル国政府優秀文化人賞等受賞多数。96年日本映画学校校長、2011年日本映画大学学長、現在同大学名誉学長を務める。著書に『日本映画史 全四巻』（岩波書店）、『世界映画史 上下巻』（第三文明社）、『大島渚の世界』（筑摩書房）、『恋愛映画小史』（中日映画社）等多数。

生きる希望を教えた
戦後の二本のアメリカ映画

原田 佐藤先生は、映画を通じて、自分たちは何者なのか、日本という社会は何なのかという問いに答えようとされてきたと思います。

黒澤明、溝口健二、小津安二郎、大島渚といった主要な監督の作家論、全四巻の『日本映画史』をはじめとした多くの著作を上梓されています。映画評論家の中でこれほどたくさん本を書かれた方は、いらっしゃらないと思いますが、書き続ける情熱がどこにおありなのかということからお聞きしたいと思います。

佐藤 情熱があって書いたんですかね。まず、私と映画の出会いからお話したいと思います。戦争中、海軍の予科練、海軍飛行予科練習生に行きました。特別に愛国的情熱に燃えて行ったわけではなくて、当時は誰でも行くものだったから行った。ところが、それで中学、高校と進む進学コースから外れた。予科練から帰ってきて、まだ十四、五歳です。非常に半端な形で社会に出ってしまった。

そこで、郷里の新潟の鉄道教習所に行った。もともと若い鉄道員が入学する学校だから、わずかだけれども国鉄（日本国有鉄道、現JR）から給料をもらえるんです。生徒に給料を払う学校です。後から考えたら、非常にいい学校に入ったというべきですが、その当時はわからない。給料をもらって勉強すればいいので、その給料をひたすら映画に使いました。

なぜそうしたかという、敗戦後、自分で物の考え方をどう切りかえていかよくわからない。終戦の翌年の春ぐらいに、アメリカ映画が何年ぶりかで輸入されるようになって、そのときに観たのが、『キューリー夫人』という真面目な伝記映画と、『オーケストラの少女』で主演したディアナ・ダービンが二十歳ぐらいいなくなって出ている娯楽映画『春の序曲』。これにびっくりしました。なぜかという、映画がこんなに楽しいものだったのかと驚いたんです。例えば、若い女性が街を歩くのに、ちょっとリズムを持って、非常に楽しそうな歩き方をする。そして、それを通りすがりの男たちがみんな、ああ、いい娘だなというような感じで振り返っていく。非常に楽しそうな若者たちがアメリカにはいる。それで病みつきになった。『キューリー夫人』では、ムツシュ・キューリーが、自分の弟子で学生だった彼女に求婚する。非常に女性を立てて、ひざまずくようなイメージで求婚する。これはすごいなと思いました。そのときから、人生いい恋愛ができればそれでいい、そう信じちゃったんです。自分は小学校だけで軍隊に行つて、進学しそびれて、出世コースにはもう向いていない。では人生に希望がないかといえば、恋愛して、アイ・ラブ・ユーと男のほろがひざまずくようにして彼女に言う、こういう経験をするために人生がある、そう思い込んだ。これは成功しました。

原田 すてきな奥様ですからね。
佐藤 そのとおりになった。だから、私の人生は成功したんです。学校に戻ったら、先生が昨日とは違って民主主義を教え始めた。私の同世代は大体そういう経験を持っています、私はそう裏切られたとは思いませんでした。別の

人生の目標が見つかったからです。それが恋愛です。目の前に恋人がいるわけじゃない。恋愛を空想させてくれるのはアメリカ映画です。だから、アメリカ映画を夢中になって観たんです。ところが、鉄道教習所に三年いて、卒業して職場に出るとすぐ、公務員を対象に一〇万人ぐらいの首切りがあり、私は真つ先に首になりました。

任侠映画の評論から始まった

原田 戦後一九四九年のドッジの大緊縮策ですね。

佐藤 そこで、地元新潟の電信電話公社（現NTT）の電話機の修理工場で働きましたが、その仕事に情熱は感じなかった。やっぱ映画にかかわりのある仕事をしたいと思っただけですが、助監督になれるのは、私の同世代でいうと、大島渚とか山田洋次とか今村昌平とか、一流大学の優秀な卒業生なんです。そういう人間でないとなれない時代になっていた。

それで、シナリオなら書けるんじゃないかと思いました。シナリオ作家養成所みたいな機関があち

こちにあつて、そこで二、三本書いたのですが、結論として、自分にはシナリオ作家になる才能がないとわかりました。

ただ、シナリオを書くために映画の勉強を始めました。休日には、夜行列車で東京に行つて、古本屋街を歩いて、リュックサックにいっぱい昔の映画雑誌などを買い込んで、その晩の夜行で帰ってくるというような生活をしていました。伊丹万作監督が、戦争中、『日本映画』という雑誌でシナリオの批評を書いていた。これが非常に勉強になりました。映画を論ずることを伊丹万作から学びましたね。

それで、シナリオを書く才能はないけれども、映画を観て議論をする才能はあるということに気がつきました。映画雑誌に投書するようになって、投書の常連になりました。映画雑誌だけではつまらないと思い、『思想の科学』という雑誌にも投書したところ、これを鶴見俊輔さんが読んで絶賛してくれました。鶴見さんは、当時、若手の哲学者の中で一番有名でした。鶴見さんのおかげで、当時の

思想界の若手の間で私の名前が知れ渡って、『思想の科学』の編集にも携わるようになりました。

当時、私が書いて一番評判になったのは、任侠映画を思想的に論じた「任侠について」です。これも始まりは、鶴見さんが似たような論文を書いていたから、そのまねだったんですが、私のほうがリアリティーがあると思われた。鶴見さんの書くチャンバラ論は怪しいと思われた。

原田 こんなインテリが本当に理解しているのかという感じでしょか。鶴見さんは戦前にハーバード大学に留学していたぐらいの人ですからね。

佐藤 鶴見さんに絶賛されたので、ほかの雑誌からも原稿の依頼が来るようになった。どたばた喜劇のエノケン（榎本健一）にも、通俗メロドラマにも思想があると書きました。それで注目され、映画雑誌の編集部に入れてもらって批評家になりました。民衆の思想というのはいくつものものと私が論じたら、これが時代の先端を行くように注目されました。

自分に書けることは何だろうと

いうことから始めて、庶民的な大衆映画を分析すると、それまでなかった大衆映画論という評論の分野ができました。しかし、こればかり書いているわけにもいかない。

映画評論は、専らもう少し高尚な映画を論じてきました。ルネ・クレール、ジュリアン・デュヴィヴィエとか。だから、それは私だつて論じられると言つてそういうものも書いたら、そつちも通用した。

原田 フランスのヌーベルバーグの批評も書かれましたね。

佐藤 そういうものを書いているうちに、大島渚が私に目をつけて、「自分はもうじき監督になって、独特の流れをつくり出す。その流れを褒めるのは佐藤だ」と言ってくれました。私は、学生運動の理論的根拠みたいなものを書いた。誰にも書けない大島渚論を書いた。大島はちゃんとそういう計算をして私を自分の代弁者にしてました。私もそれに乗り気になりました。そうすると、低学歴の通俗映画評論家というレッテルが消えて、難しい映画も論じられる批評家になっていました。

日本映画の解説者として私は一

応認められて、国際交流基金が日本映画の宣伝のためにアジア諸国のあちこちで映画会をやる、その講師に派遣されたりしました。それは、映画論だけでなく、日本の社会、文化まで論じてほしい、ということがあったからだと思います。

アジアの映画を発掘し 批評の力で世界に広める

原田 世界に映画を広め始めるわけですね。

佐藤 最初は、山田洋次監督の『幸福の黄色いハンカチ』を持って、監督ご本人と二人でタイ、フィリピン、インドネシアで上映して回りました。山田さんはもちろん『幸福の黄色いハンカチ』の話をし、私はそれと一緒に上映した小津、溝口、黒澤の作品の解説をしました。

そして、行く先々で大抵、「あしたは観光でご案内します」と言われる。そのとき、山田さんと私は、「観光はいいですから、あなたの国の最近一番ヒットした映画を観てください」と頼みました。これらの国のヒット映画を観ると、いいところがあります。

タイに行ったとき、最近のタイの映画では何がおもしろいですかと聞いたら、インタビュに来た記者が、タイの知識層はタイの映画を観ませんと言った。

原田 昔、日本でもそういうところがありましたね。

佐藤 日本は昭和二年（一九二七）にそれを終えたんです。昭和二年とはどういう年か。伊藤大輔の『忠次旅日記』と、翌年には五所平之助の『村の花嫁』、この二本の傑作があらわれて、日本映画もようやく世界の水準に達したと、みんながそう言った頃です。これは飯島正先生から聞いたのですが、昭和二年に日本の知識層は——知識層というのは中学生以上、要するに、英語を習っているということですから、日本映画を観ることを恥ずかしながらに済むようになりました。タイの人の話を聞いたときに、義憤を感じましたね。

そこで、日本の国際交流基金の出張所の人にタイのヒット作を聞いたんです。そうしたら、ビデオを届けてくれました。それを山田さんと二人で観て、結構いいじゃ



れた映画もつくりました。

とにかく、日本でアジアの映画の話をするだけでも大変な影響があるんですね。これは一九五一年に『羅生門』がベニス国際映画祭でグランプリ（金獅子賞）をとったときに私が感じたことです。日本映画は決して悪くないと思っていましたが、国際的に評判にならない。しかし、やっと日本映画が国際的に認められる時代が来た。黒澤さんも喜んだろうけれども、私もそのときものすごく喜んだ。だから、いい映画を観たら、やっぱり褒めなきゃいけない。

ころ、後日その監督から電話がありました。日本に留学していた青年が、タイの新聞に、「東京の新聞にタイの映画の記事が出た」と書いた。そうしたらその監督が喜んで、訪ねてきたんです。ちなみに、そのとき私は彼と義兄弟の縁を結びました。

ちょっととした記事を書いただけなのだけど、タイ映画が日本の大新聞の記事になったというだけでタイにとっては大変な事件です。非常に喜んで、彼はそれから熱心に努力して、岩波ホールで上映さ

今や日本にいても、フィンランド映画もセネガル映画も、注意していれば誰でも観ることができ。例えば、フィンランドの『アノウン・ソルジャー』は素晴らしい。

原田 大国を利用するつもりが翻弄される。小国の普通の人々がどう戦争と向き合ったかを描いた、ひたすら悲しい戦争映画ですね。

佐藤 非常に伝統のある国、フランスやドイツの芸術家がつくっている映画だけが映画じゃない、東南アジアにも観る価値のある映画がある。なぜか私、アジア諸国に講演に呼ばれることが多くて、韓国とか中国に呼ばれて、そこでその国の映画を発見しては絶賛する。そうすると、その国で一つの伝説が生まれます。例えば中国映画なんて、六〇年代ぐらいまではほとんど世界には知られていなかった。韓国もそうですね。しかし、それらの国にも世界的な水準でいい映画があるということを感じましたね。

原田 四〇年代の中国映画を発掘されたという話もありますね。

佐藤 七〇年代、中国映画界と親

しかったのは徳間書房の徳間康快さんですけれども、一九六六年に始まった文化大革命のために中国は一〇年間鎖国状態になって、外国映画の情報が全く入らなくなっていました。それで、中国が、世界の映画情勢について話ができる人を紹介して欲しいと徳間さんに頼んで、私が中国に行くことになりました。

そのとき、中国では当時の社会主義イデオロギーの新作がいろいろあって、それを私に観せようとする。しかし私は、「中国には、日中戦争の直前それから直後、この頃にいい映画があると聞いた、それを観せてください」と熱心に頼んだら、探してきて一〇本ばかり観せてくれた。これが素晴らしいかった。

第二次大戦直後は、世界の新しい映画といえばイタリアのネオリアリズムが評判だったんですが、四九年、社会主義になる直前につくれた『カラスと雀』は、ネオリアリズムのトップクラスの作品と比べても決して劣らない、非常にすぐれたリアリズムの映画です。私はこういう映画を観て絶賛

する。中国語も英語もできないのに、何か熱狂的に褒めているというだけでは中国人にも伝わる。批評はけなすことによって影響を及ぼすと思われているようですが、人はけなした批評を信じません。むしろ褒めることが確実に影響を及ぼします。

これをきっかけに世界に全く知られていない中国映画も、一九四〇年代には世界的水準の作品が一〇本や二〇本はある、そういうことが国際的に知られるようになって、イタリアのミラノで中国映画の古い作品だけを一〇〇本ほど集めた上映会が行われました。知られざる映画史の発掘競争みたいなものが行われて、私はそのトップランナーだったわけですね。そういう意味で、この頃映画批評家として先頭を走っている一人だという自覚を持つようになった。一度そういう自覚を持つと、いかげんにやめられないですね。

本です。なぜかというところ、タイの映画がどうかとか、メキシコの映画がどうかとか、そういうことがいっぱい書いてあって、偉大なるルノワールなどについては誰でもが書けるような程度にしか書いてないからです。

ですが、そうになると私も意地です。よく探せば世界中どこにもいい映画がある。こういうことが常識になるまで頑張ろうと思っています。

インドでは、デリーとムンバイで、古くから歌と踊りの映画がいつぱいつくられています。実はインドで映画をつくっている土地は二〇カ所ぐらいあります。ローカルの映画でリアリズムの映画がある。私がインドの映画で一番好きなのは、南の端っこのインド洋側にあるケーララ州のマラーヤラム語映画。年間二〇本か三〇本はつくっている。私が「あなたの映画史上のベストワン、生涯のベストワンは何ですか」と問われたら、普通の場所では小津の『東京物語』ですと答えますが、少し常識外の知識も持っているような人には、インドのケーララ州

のG・アラビンダンという監督の『魔法使いのおじいさん』ですと答える。これはほとんど誰も知らない映画ですが、日本でも三度ぐらい深夜にテレビで放送されたことがあります。児童映画ですが、童心というものをこんなに天衣無縫に描いた映画は、私の長い映画人生でこれ以上のものはないですね。

映画は世界を結ぶ文化 人々は理解しあえる

原田 映画で日本を理解するということから出発されたと思います。が、今や世界を理解しようと思われていますね。世界を理解できたと思われませんか。

佐藤 まだまだ。ちよつとのぞくことも容易じゃないのはイスラム世界です。だから、イスラム系の映画を観る機会を一生懸命狙っています。でも恋愛映画がない。しかし、よくよく探せばある。イランなんかには多いのですが、例えば、テヘランの街角で若い男女がしばらく立ち話をしている。すると、通行人か誰かが民警を呼んで、怪しいと密告する。親が呼び出さ

れて、親は早速病院に娘を連れていく。なぜかというところ、処女性失われていないかを確認するためなんです。イランでは町なかで立ち話をするぐらいでしか男女交際ができない、そちらのほうが問題じゃないか。そういうテーマの映画がイランでは結構あります。私は、そういう映画人たちこそ世界を良くするための同志であって、そういう映画をもっと広めないといけないと思っているんです。

アメリカで、イランは恋愛の自由もない国だと思っている人は多い。しかし、少なくともイランには恋愛の自由を求める映画があり、それが支持されている。自由と真実と寛大さを求めるさまざまな国の映画を、世界に広め、褒めたたえることを続けなければならぬ。

世界の映画は、実に一部分しか観られていません。世界には、誰も知らないようなところに誰も知らない傑作をつくっている映画人が存在します。だから、映画批評を書くことはやめられないんです。**原田** 本日は大変興味深いお話をありがとうございました。